

ブドウ環状はく皮のクビアカスカシバ防除について

～食害を許さない。環状はく皮の効果的なクビアカスカシバ対策～

木本直樹（東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成26年3月20日掲載】

【要約】

夏期の高温を原因とする「巨峰」の着色不良対策として、産地で環状はく皮技術が取り組まれている。しかし、はく皮実施部分へのクビアカスカシバの食害が問題となっていた。そこで、7月上旬に、カルタップ水溶剤（商品名：パダンSG水溶剤）1,500倍を樹幹に散布したところ、クビアカスカシバの食害を抑えることができた。

1 はじめに

近年、夏期の極端な高温が「巨峰」の着色不良を引き起こし、出荷の遅れ、品質の低下を招いている。対策技術として、環状はく皮という、樹の表皮を一定の幅で剥ぎ取ることによって、地下部への同化産物の転流を遮り、地上部にある果実の着色を向上させる技術が、産地で取り組まれ始めた。しかし、樹に傷をつける技術の性質上、はく皮部分に枝幹害虫であるクビアカスカシバが食入することが問題となっていた。特に癒合した、はく皮部のカルスを食害されると樹液の流入が断たれ、樹勢の低下や枯死する恐れがある。

平成23年5月11日、カルタップ水溶剤（商品名：パダンSG水溶剤）が、ブドウのスカシバ類への登録を拡大した。そこで、薬剤の防除効果を確認し、環状はく皮を行った際のクビアカスカシバに対する防除方法の確立に取り組んだ。

2 試験区の構成と調査方法

18年生の「巨峰」成木樹に、花満開30日後（平成24年7月4日）、主幹部に対して、5mm幅で環状剥皮を実施した。1区8樹とし、試験区はカルタップ水溶剤1,500倍を主幹部を中心に、薬液が十分にかかるように、肩掛け動噴で丁寧に散布した（写真1）。慣行区は無散布とし、両区のクビアカスカシバ幼虫の食入数を調査した。

薬剤の散布時期は、試験地域に設置したクビアカスカシバ成虫の発生予察トラップから、成虫が多発生する時期が6月下旬～7月初旬であるため、7月4日とした。



写真1

パダンSG水溶剤を散布する試験ほ場園主

3 結果

(1) 防除効果について

カルタップ水溶剤散布から9月25日まで、約10日間隔で、クビアカスカシバ幼虫の食入数を調査した。試験区では、調査期間を通して食入は0頭であったが、慣行区は8樹中2樹でクビアカスカシバ幼虫が計8頭食入した(表1)。

表1 幼虫食入数の推移

区 分	幼 虫 食 入 数 (頭)							
	7/4	7/14	7/25	8/3	8/16	8/27	9/10	9/25
試験区	0	0	0	0	0	0	0	0
慣行区	0	0	0	0	0	5	3	0

* 幼虫は、食入確認次第、直ちに補殺した。



写真2



写真3



写真4

写真2 きれいはく皮部分が癒合した試験区

写真3 食害による虫糞が確認された慣行区

写真4 食入した、クビアカスカシバ幼虫 (矢印)

(2) 薬害について

試験区において、薬害は見られなかった。果実の着色期に入っていたが、動力噴霧器で主幹部へ丁寧に散布したため、果粒の果粉溶脱等も見られなかった。

4 考察

(1) 防除の効果

カルタップ水溶剤を7月上旬に主幹部を中心に散布することで、クビアカスカシバの食入を抑えることができた。薬剤散布による薬害も見られなかった。試験圃場は、近年、毎年のように、クビアカスカシバによる食害を受けてきたが、カルタップ水溶剤による防除に取り組むようになってから、食害が見られなくなった。また、同じ地域の別のクビアカスカシバ多発生園でも、7月上旬に同様の防除を行ったことで食害が見られなかった。

(2) 実施上の注意点

カルタップ水溶剤（商品名：パダンSG水溶剤）は、農薬取締法上、「大粒種ぶどう」のみの登録（平成26年2月現在）のため、デラウェア等の小粒種ぶどうでは実施できない。また、使用基準も収穫21日前まで、使用回数5回以内のため、収穫日に十分注意し散布する必要がある。クビアカスカシバは、長い期間にわたり園外から飛来するので、発生多発園では防除後も食入痕がないか、こまめに確認したい。